

と人」ととの関係をつくり、あらゆる差別とどう向き合い、乗り越えるために自分は何をするのか、自分たちの考えをベースに導き出し、その日から具体的な行動につなげていく学級及び学校の営みは、三輪さん自身の生き方を反映しているようで、学校や地域におけるリーダーのあるべき姿を教えていただいたと、多くの参加者が感じておられました。今現在教育現場におられ、様々な問題と日々格闘されている教師ならではの、生の実践と、一言一言に込められた熱い願いから、全ての参加者が、今後の自分のありようを考え、三輪さんからいただいた思いをそれぞれの現場で活かすことが出来る内容であったと思います。

次に、田玉英子さんより、「ぼくは、ぼくの話し方で」～ きつ音を伴って話す子どもとともに ～と題して、北信教育事務所の宮坂宏さんのコーディネートにより、実践発表をしていただきました。参加者からは、

・私の義父にはきつ音があるが、妻も二人の息子も気にしていないし、待つことができる。近くで接することが大切だと思う。(群馬)

・きつ音や被差別部落の生徒をひとまとめにせず、一人一人の生い立ち、生活、その中に介在した差別の現実を知り、思いを受け取ること、次の差別に満ちた社会に行く前に自分を見失わないでいけるようにすることだと、会場の議論を聴いていて思った。(東京)

・田玉さんの報告では、子どもとのやりとりだけでなく、背景(母親のことなど)を知りたくなった。理解することをもう一度考えたい。(東京)

・私の家族に障がいを持つ者がいるので、共感しながら聴かせていただいた。障がい他、様々あっても、それはその人の個性であり、周りが関わっていく教育が大切だ。(神奈川)

・きつ音への差別にどう立ち向かうかということを考えさせられた。(神奈川)



実践報告 田玉幸子さん
(千曲市立屋代小学校)



実践報告コーディネーター
宮坂宏さん
(長野県教育委員会事務局北信
教育事務所)

・『あけぼの』が一つの差別につながる課題について、考えるきっかけになっていくことが大切なのではないかと思った。(長野)

・田玉さんのお話を伺い、きつ音のある人について深く学ぶことができた。いろいろな方のご意見を聞き、ことばの教室が、(きつ音に対する)周囲の理解がない中で、その子がどう生きていくことを一緒に考えていく場だということをあらためて学ぶことができた。(長野)

・田玉さんの報告を聞いて、うちの学校にいる緘黙の子のことを考えながら、気持ちをちゃんと聞いていない自分をふり返ることができた。(千葉)
等のご感想をいただきました。

『あけぼの 小学校中学年向け 6訂版』にあらたに掲載された「ぼくは、ぼくの話し方で」誕生のエピソード及びその後の活動の報告から、長野県における「ことばの教室」の実態及び個々の児童への具体的な支援の様子について、田

玉さんのとても温かで、児童への未来に向けた願いを強く持った息の長い取り組みの尊さを確認することができました。また、「特別支援教育」に対する、他都府県との考えや歴史の違いが、参加者からの意見から明らかになったことも貴重であったのではないかと考えます。北信教育事務所生涯学習課の宮坂宏さんによる丁寧なコーディネートによって、現在の長野県における「ことばの教室」の意義や課題等が明確になったと考えます。

県外の参加者からあった『ことばの教室はいらない』という意見に対しては、もう少し時間をいただければ、その意義や必要性について、長野県の立場を述べる事ができたと思いますが、三輪さんの『学校は地域の保健室』という喩えに倣えば、「ことばの教室」についても、よりわかりやすい説明が出来るのではないかと考えました。

また、講座翌日の信濃毎日新聞一面に掲載された『3歳児吃音問診割れる県内対応』の記事にもあったとおり、「きつ音」に対して、より早く、適切な対応が求められている実態について、具体的な状況を把握しながら、今後の『あけぼの』指導のあり方や改訂に活かして参りたいと考えます。貴重な実践発表を有り難うございました。

